

国民生活研究所編

『主婦の生活構造』

——都中と農村の生活レポート——

井出 ふさえ

「主婦農業」という言葉がシャーマナリズムをにきわしてから数年をへた。しかし、それを主テーマの一つとして一冊の本に書かれたものは本書がはじめてのよう思う。農村婦人、生活問題に関心をもつものとして、農村を含めての現在の日本の主婦の生活構造の全貌とそこでの農村主婦の生活構造の特質を知るために、本書の発刊に大きな期待をもった。

しかし、本書か、丸岡秀子、長瀬タキエ、大橋一雄、毛利明子、北川隆吉、中沢綾枝、六氏のそれぞれに個性のあるレポート集の色彩が濃厚であるという読後感を持った時、私は書評を

行なうことに大きな躊躇を覚えた。たが農村婦人問題の分野に關する単行本のうち、もつとも近刊のものであるということに注目して、あえてそれを行なうこととした。「それぞれに個性あるレポート集の色彩が濃厚である」というのは拙言を提したわけではない。本書は「都市と農村の生活レポート」という副題によってその性格を端的に示している。本題も「主婦の生活構造」であつて「生活構造論」などというものではない。

丸岡秀子氏も、序論において次のようにのべている。

「農村と都市の主婦生活が最近の経済成長の中で、どのような変化をとげ、また今後とけていくものかについて、いくつかな実態を基調に、概括したわけである。しかし……また未着手の主婦生活の実態及び動向には、重要な因子があり、今後さらにこれらの面での研究が進められなければならないと思う。従つて今回の調査報告は、極めて部分的なものであり、またその比較であるため、不十分な点は認め合いつつも、一応とりまておくことも大切であろうことにした。」

今日の段階では、さまざまな階層と地域での婦人の生活の実態に広く大きな照明をあてられること自体が大きな意味をもつと考えられる。なせなら、そうした問題は、ある場合は、僅かな事例から立体的にというよりも、むしろ、直接的に社会問題にくみこまれてしまう。また、本米、数をもつては、きわ

めてとらえにくい問題であるために、巨視的な統計的分析の網によつてはすくいえないところに、重要な因子が存在している場合もある。

本書の果す役割の一つとして、一般読者及び研究者に、考察及び分析の素材となる実態の再現の提供が行なわれていることを第一に評価すべきであらう。

本書の目次を最初に掲げておきたい。

第I章 序論

第II章 農村の生活と主婦

第1節 出稼し地帯（新潟県東頸城郡松之山町）

第2節 都市近郊平場地帯（新潟県中頸城郡頸城村）

第3節 主婦農業の問題点

第III章 都市の生活と主婦（石川島播磨重工業株式会社従業員

員の家庭調査）

第IV章 「主婦問題」の社会的背景

本書の叙述の順序はこのように「農村の生活と主婦」が「都市の生活と主婦」の前にある。しかし、本書の基礎をなす調査の初期の目標は、最近の日本経済の変化の中で、それか労働者に及ぼす影響、とくに家庭の主婦の生活構造の変化の実態、今後の動向、意識面にあたえている影響などを明らかにすること

にあったと述べられている。そのために比較対象の一つとして農村生活はとりあげられたものである。またこのような方法によつて農村生活も都市と比較して、その特質を把握しうる可能性をもつものであらう。

二

この点を考える時、本書の構成の方法には理解に苦しむ問題がある。その一つは実態調査の方法の全くの不統一性である。

農村と都市の家庭調査には、同一の調査方法が採用されない理由もある。しかし、それならば、その理由を明らかにし、何をもちて比較の尺度とされたのか、読者を困惑させない措置があつてしかるべきであらう。それはない。

また、「都市の生活と主婦」は、石川島播磨重工業株式会社の従業員二八七世帯の世帯別調査をまとめたものであるが、どこまでが既存資料を用いたか、聞き取り調査によるものか、アンケートの回収による答の整理によるものかなど調査の条件は必ずしも明らかでない。同じことは「農村の主婦と生活」の調査についてもほはいえるものである。

さて、この調査方法の不明確な点はさておき、都市と農村の比較という前提にたちながら、叙述の展開の論理に共通性が存在しないのはいかなる理由によるものであらうか。

第Ⅲ章 「都市の生活と主婦」は次のような展開の順序をもつて叙述されている。

第1節 調査対象の概況

第2節 生活の基盤

第3節 生活様式および構造

第4節 主婦の生活時間

第5節 生活意識

第6節 主婦の生活構造と生活意識

これに対して第Ⅱ章「農村の生活と主婦」は、先に目次においてかかげた二地帯の実態調査——この二地帯の調査結果の叙述の方法も、まよめの論理もそれそれ異なっている——がまず述べられ、そのまよめとしての第3節「主婦農業の問題点」をもつてしめくりとしている。

その節は次のような構成である。

(1) まよがき

(2) 兼業化のもたらす問題 その1

(3) 兼業化のもたらす問題 その2

(4) 通勤兼業農家の場合

(5) 出稼き農家の場合

(6) 農業の衰退

大橋一雄氏のまとめられたこの部分は、まず「現在の主婦農

業のもつ問題点と、第二次大戦下における職工農家もつた問題点とは、本質的に変わるものではない。変わった点は量的に増加したことと、耕作面積の大きな農家にも及んでいったことである。あえて主婦農業などという言葉をつくつて、新しい問題であるかのように見せかける必要は少しもないといえる。労働市場が拡がり、求人があれば、農家の労働力はそれに応ずるものであることを、今更めて認識することはないのである。」(一七頁)という現在の主婦農業の直截的な位置づけに関する叙述をもつてはじまり、主婦農業の問題点の要点を指摘した一つのまとまった分析である。しかし、第1節、第2節と関連して述べられたものでないことに大きな戸惑いを感ぜざるを得ない。さらに氏の分析の対象が主婦農業による農業生産の衰退であり、破壊であることを考える時、都市と比較しての主婦の生活構造という本書のテーマの行方を読者はどこにもとめるべきであろうかと考えさせるものがある。この第1章第3節は、現段階における日本の産業構造における農業の地位と、就業構造の変動による農家の労働力構成についての独立した叙述と解される。

実は、同じ傾向の批判を、北川隆吉氏のまとめられた「都市の生活と主婦」についても私はもつものである。本章は都市の生活と主婦の生活構造というよりも、むしろ、石川島橋重工

業従業員家庭の調査によって、わが国大企業の主婦が、夫を媒介として、つよくその経済体そのものに規制され、生活構造が勤労者一般としてパターン化する以前に、企業色のつよい一定のパターンにかたづけられているという点を強調された一つの独立の実態調査報告の性格をもつと云えよう。

三

都市の主婦の生活構造を知るために、石川島播磨重工業が選ばれたのは、それが、「わが国における大企業労働者として典型的とはいえないが、ほぼ平均的（従業員数・平均賃金・平均年令・労働時間などにおいて）な状態であるとみてさしつかえあるまい」（一三九頁）ということにあるとのべられている。

「典型的とはいえないが、ほぼ平均的である」というが、典型的とはいえないのはなぜか、そしてまた典型をさけて、先にあげた諸点について平均的であるという理由でこの企業が選ばれた積極の意味について知りたい。そしてまたそれが本書のテーマが主婦の生活構造であるということと関連があるのかないのか、あるとすればいかなる意味においてであるかについて知りたい。

鉄鋼業、重軽電機工業、紡績業、自動車工業など数ある産業部門のなかで、そしてまた企業系列下でのさまざまな地位

におかれる諸企業のなかで、なぜ造船業であらねばならないかという理由、そしてなぜそれが石川島播磨重工業であらねばならないかという理由を知りたい。「あらねばならない」が不都合であれば、それらのなかでのその特質——とくに主婦の生活構造と関連して——を教示されたいと思う。さらに云えば、それが農村に対比して都市——農業に対して工業というところらえ方は本書において殆んどみられない——の主婦の生活構造についてのモデルケースたりえているという理由があるとすれば、まず第一にあげられなければならないのではなないだろうか。

四

第二章「農村の生活と主婦」の調査対象は、山間の古くからの典型的な出稼ぎ地帯と代表的な水田単作地帯の二つから選ばれた。先に「都市の生活と主婦」の調査方法についてふれたが、そこには、夫の収入、学歴、残業時間から主婦の小づかい、主婦の出席する会合などなどについての二、七世帯の同一設問に対する解答の量的傾向にもとづく分析があった。ここにはそれに相当するものはない。ないばかりでなく、ここにはきめこまやかな個別農家の生活と生活史の物語がつづられている。その一例をあげておこう。

「Cさんの妻も結婚前は製糸工場に五年働いた出稼ぎ者

である。結婚して一〇年、毎年夫を出稼きに出し、しかも一年のうち一〇カ月後家くらし、その間夫からの使りを受け取ったのは二回、それもしゅうとへの手紙に同封したものであった。送金ももちろんしゅうと宛である。このような処置をうけている妻の気持はどうなのだろうか。その心境を次のように語るのであった。

結婚当初はさびしかったが、仕方のないこととあきらめるようになり、このころでは子どもも大きくなり、欲も手伝ってなるべく長時間働いて、できるだけ多く稼いでほしいとおもうようになった。しかし子どもたちのためにはそばにいてもらいたい。なせなら父親がいれば、①PTAの会合にも出席してもらえ。②勉強もみてもらえ。③駄もできるのに父親がいなくために押えがきかない。また赤ん坊にミルクを飲ませたいとおもっても、それをしゅうとには言えない嫁の立場を訴える。でも夫は帰宅したときしゅうとたちに内緒で、小遣一、〇〇〇円呉れるとうれしゅうとにいつていた」(一三〇頁)。

私は決して都市と農村に対して同じアンケートを行なうべきだとか、同じ調子の個別労働者の生活史の物語りを書いてほしいというのではないが、なせそうする必要がないのか、そうしないのか、本書をよむ限りでは分らない。むしろ一読者として

は、叙述の方法が部分ことに余りちがうのは読解の流れをさまたげるように感ずる。

五

本書の特徴を比喩的に一言で表現すれば一種の「クロスワード・パズルのような本」と私はいいたい。クロスワード・パズルは、意味と内容をもついくつかの言葉からなり立っているが、その言葉は、縦や横にいろいろな方向をむいている。言葉の結合点の文字さえ、解読者が見出さなければならぬ。解読の鍵としてところどころに太い文字が入っているが、言葉による一つの模様をなすクロスワード全体を解くには頭を余料つかわなければならぬ。

本書は、また、不思議な本である、実に多くの問題——第Ⅱ章第2節にはその地域の構造改革事業の概観もあり、共同化の紹介もあり、第Ⅳ章には物価上昇問題、農民の栄養問題もある——に光をあてている(分析しているかどうかは別として)のであるが、その光の角度も色も浸透度も実に多様なのである。共同執筆というものに執筆者によって論理構造・問題意識のくいちがいがいささかあるのは通例ともいえようが、むしろ、くいちがいがあつたことを、そしてそれがどこどこかを読者に示しておく部分があつてもよいのではなかつたかと思われてなら

ない。

現段階において、「主婦の生活構造」の分析にとってもっとも大切なことは、農村の生活構造それ自体のなかにある「都市の生活構造」そして「都市の生活構造」に影をおとす「農村の生活構造」を一つの共通したメカニズムのものとして把握することにあると考えていた私が、「都市と農村の生活レポート」という副題をもった本書に対して、こうした書評を行なうことによって「ないものねたり」をした傾向があることを最後にお詫びしておきたい。